NYレコーディング凱旋記念:10008字インタビュー

キャプテンストライダム

●なんでも昨年の9月末(※1)にアメリカに行ってきたらしいですね。

永友: そうですね。約3週間行ってました。23日間。 ●キャプスト (※2) としては初となる海外レコー ディング…ニューヨークのブルックリンでレコーディングしたらしいですが、何故そういう話に?

永友:本当に寝耳に水みたいな話なんです。ある日 事務所でミーティングしてる時、薮から棒(※3) に「Steve Jordan(※4)がキャプストに興味を 持っているけど」って言われて…。

●逆指名されたわけですね。

永友:そうそう、逆指名。ちょうど彼の中ではプロデュース業に力を入れたいという意志があったらしいんです。特に日本のパンドに興味を持っていたみたいで、色んなCDがSteve Jordanに送られていたらしいんですけど、その中から何故か僕らが。

●事務所パワーが炸裂したんですか? (※5)

永友:いや、ウチの事務所に所属する人だけじゃなくて、他にも沢山送ってたらしいのでそういう訳じゃないみたいです。それが6月末頃だったんです。

●それで、すぐにやることを決めたんですか?

永友:ます「Steve Jordanが興味を持ってるけど、 やる気はあるか?」と訊かれたんです。 ていうかそ もそもSteve Jordanって、僕が世界でいちばん好 きなドラマーなんですよ。

●菊住守代司よりも?

永友:菊住守代司……よりも(笑)。

一同: (笑)。

永友: "(笑)"って必ず付けといて下さいね。今 の所は"(笑)"が付いてるのと付いて無いのじゃ、 えらい違いですから(※6)。

●はい、わかりました(笑)。

永友: O6年の暮れにThe Verbs (※7) の来日公 演をみんなで観に行ったんですけど、そこで初めて Steve Jordanのプレイを生で観てすごく感動して。 その人と一緒に仕事をするっていうことがすぐにイ メージ出来なかったんですね。

●言ってみれば雲の上の存在というか。

永友:だけど "結果的にどうなってもいいからやってみよう"ってことになって、曲を作ったりして。 そのウチに渡米の日取りとかが決まっていったんで すけど、やっぱり実感が湧かないんですよね。「同 姓同名の別人なんじゃないか?」とか(笑)。

●行ってみてどうでした?

永友:着いた日の夜に初めてSteve Jordanと会って、翌日からレコーディングっていう流れだったんです。

菊住:僕の中でもドラム界ランキング1位ですから

「全然ダメでした。こんなことをやっててもワクワクしない」



2007年3月、3rdアルバム『BAN BAN BAN』リリース&渋谷公会堂でのワンマンを経て、各地でその名を轟かせたキテレツ系骨太ロックバンド・キャプテンストライダムが、世界一のドラマー/プロデューサー・Steve Jordanのエキスを吸って更なる深化を成し遂げた! 「なにかを吐き出したかった」という想いを携えて鳴らされるシングル『わがままチャック』には、3人が放つロック汁が溢れ出している。浴びろ! みんなで汁を浴びるのだ!

ね。何を言われるかわからなくて、結構ビビってた んですよ。

永友: 「お前はそれでドラムを叩いているつもりなのか?」とか。

梅田:「さあ、そろそろドラムを叩いてもらおうか」 とか。

●そんなこと言われたら凹みますね(笑)。

菊住:Steve Jordanのドラムプロデュースは"こんな風にやったらどうだ"って目の前で叩いてくれるらしいっていう前情報をチラッと聞いてて、逆にそういう前情報も微妙にプレッシャーになっちゃって(笑)。

梅田:無理な超絶ブレイとか要求されたらね(笑)。 菊住:楽しみでもありましたけど…楽しみ7割くら いでビビり3割でしたね。

永友: 3人ともガチガチだったんですけどSteveは(※8)、会ってすぐに「君たちはヘッドホンは好きか?」みたいな感じで訊かれて。

●ヘッドホンが好き?

永友:要するにレコーディングの時、ヘッドホンを して演奏するのは好きか? ということを訳かれた んです。それで「出来れば普段のスタジオとかでも、 ライブで演ってるみたいに生で聴きたいですよね」 って言ったら「じゃあ明日からのレコーディングは ヘッドホン無しだ」って言うんですよ。

●そういう感じなんですか。それは意外ですよね。

永友: 「君たちは自分がいちばん気持ちよく演奏を することだけに集中すればいいし、我々はそれをい い音で録るのが仕事だから。何も心配ないぞ」って 言ってくれて。

●すごくいい人ですね(※9)。

永友: そうなんですよ。初日で "いいものが出来る に違いない" っていう感じがありましたね。 菊住: よかったですねぇ。

●レコーディングで新たな発見はありました?

永友: Stevelは "プロデューサーとバンド"という より、もっと同じ目線で音楽を作っていくっていう か。 "仲間"っていう感じがあって新鮮でしたね。 梅田: 1曲を通してずっと同じグルーヴでノリを出 し続けるという考え方は新しかったですね。「やっ てることはロックであってフュージョンじゃないん だから、とにかく1曲通してのグルーヴ感に全てを 込めろ」とか「頭で考えるより、本当にその音楽に 耳を傾ければ自然と演奏するべきことが見つかる」 って言われたんです。彼り場合、そういうのをブー スに入ってきて一緒に探していくんですね。普通の プロデューサーとかだったらそんなこと無いのに。

●「普通のプロデューサー」って(※10)。一同:(等)。

棚田:一般的なプロデューサーはね(笑)。Steve はブースに積極的に入って来て、一緒に踊ったりとか、マラカス振ってたりとか、そういうのを大事にしてる。どの曲もグルーヴのツボっていうものがあって、それを発見すればおのすと見えてくるんだって。今回はそういうことが大事だった気がします。 新住:目の前で実際叩いてくれるんですね。「わがままチャック」のバンドインしてからのビートも、最初はもうちょっと難しいバダーンだったんです。キャクのバターンがもう少し複雑で。それを結果的にはシンプルな今の形にして。「首楽に耳を傾けれ

ば…」ってSteveは言うんだけど、それがパンッと 出て来るのがすごいなって。そこに至るまでの蓄積 があって自然とそれが出てくるっていうのかな。

●なるほど。

菊住:それに、やっぱりSteveが目の前でドラムを叩いてくれるから"世界一のグルーヴはこれか!" みたいな。世界一を見れるっていうのが衝撃的でしたね。"このグルーヴって、こんなにノれるんだ!" とか、いろんなことで痛感させてもらったというか。 僕のスティックを使って、同じセッティングで叩い て、こんないい音が出るんだってびっくりしたし。 シンバルとかこんなにしっかり鳴らすんだとか。そういうブレィ面の影響もありましたね。

●ドラマーはいろんな部分で参考になるでしょうね。 郊住:あとは、さっき梅田さんも言ってましたけど、 1曲をひとつのグルーヴでやり続けるっていうこと ですね。「わがままチャック」とかもそうなんです けど、「サビでドーンといくみたいな展開毎の抑揚 を出した方がいいのか?」って訊いたら「No!!」 って。いきなり顔がマジになって「No!!」ですか らね。やっぱり英語っていいなって思いました。

永友: そうだね、はっきりしてるもんね(※11)。 ●潔**く価値観を変えることが出来たという**。

郊住:そうですね。プレイ面でも、ちゃんと細かく やるところと大雑把にやるところとのパランスがと れてるというか。僕は全てを細かくやろうとしがち なんですけど、細かくやるべきところと細かくやる べきではないところがあるんですよね。もちろん優 終的な目標は"いいテイクを録る・いい曲を作る" っていうところで、すべてがそこに向かっていると いうか。そういうのって、頭ではわかっててもなか なか難しいんですよ。その辺のパランスの取り方が Steveは寒晴らしいなた。

●永友くんはどうでしたか?

永友:全体の調和としてのハーモニーが大事だなっ

●ヴォーカルのハーモニーとかそういう話ではなく て、バンドとしてのハーモニーということ?

永友: そうです。繊細に細かく見ることも必要なんだけど、俯瞰で見ることがすごく大事で。ビッチが合ってたりリズムが綺麗に揃ってるモノを寄せ集めたらいい音楽になるのかと言うと、そうではなかったりするんです。「わかままチャック」とか特にそうなんですけど、ひとつの流れがあって、その流れに乗って演奏して、歌も流れに乗ってるっていうのが大事で、それがハーチニーなんですよ。

●バンドの一体感というか、音楽の一体感。

永友:ちょっと練習しながらアイデアを出してる時に、段々ノリが掴めてきたらいつの間にか「Let's Go!」みたいな感じで。試しで使ったスネアとか機材が置きっぱなしになってて、それが共鳴してザーザー鳴ってたりするんですよね。でも、ちゃんと正しい形でグルーヴが流れてることを大事にするんですよ(※12)。

●もともとキャプストはそういう感覚を持っている と思ってましたけど、改めて大切さに気付かされた んですね。

永友:全体で1個の形になってることが大事だという視点を教わって。レコーディングで入り込んでいくと、細かいところに注意がいっちゃうんですよね。

でも、今の僕たちがやるべきことはそういうことじゃないんだと。 荒削りでロックっぽくてバンドっぽいんだけど、ちゃんと美しい形をしている、そういうモノを目指すのが大事なんだなって。

●ということは、もちろん技術的なこともたくさん 学んだけど、考え方や姿勢が大切なんでしょうね。

水友: そうですね。目的があって手段があるんだっ ていうことなんですよね。「わがままチャック」だったら、腰で乗れるグルーヴの曲にするために、今 自分が持っている武器をどう使うかを考える。目的 があって手段があるっていう視点を救わった。

●3rdアルバム「BAN BAN BAN」 (2007/3/7 リリース) の時は、レコーディングに入る前にリハ ーサルをやりまくったという話でしたけど、今回は どうだったんですか?

永友: 今回は日本で作ってる時からやり方を変えて たんです。そもそもアルバム [BAN BAN] を出して渋公 (※13) のワンマンライブ "BKG BAN" (2007/3/18) が終わって、その後のツアーが 終わった時、次になにをやるかっていうことが考え られなかったんです。1年がかりで渋公が目標だっ たので。

●燃え尽きた?

永友: まあ燃え尽きたんでしょうね(※14)。 それまでと同じやり方で曲を書いてリハーサルとかしてみたんですけど、全然納得いかなくてダメでしたね。 "こんなことをやっててもワクワクしない"と。

●並大抵の刺激では満足出来なくなった? (※15) 永友: そうそう (笑)。これはもう意識的に変えて いくしかないなと思って、リハスタに入るのをやめ ようと。

●セルフおあずけプレイですね。

永友: そもそも3人で同時に楽器を鳴らすと、演奏してるだけで満足感を得られるんですよ。 音圧だったり、大きな声で歌ってたりとかで。でも今度は曲を作る時にもうワンステップ高い所から見て、演奏をとはあれこれ考えずに身体で演奏したいなと思ったんです。だから曲を作る時はスタジオに入らずに僕の自宅に3人集まって(※16)、パソコンとPro Tools(※17)で宅録的に進めたんです。

●そんな人たちだとは思ってなかった(笑)。

永友:でしょ?(笑)それで僕がギターを録って、 歌メロは「大体とんな感じ」って説明しながら「じゃあベース録ってみようか」っていう感じで。ドラムも打ち込みで作っていったんです。そこでとにかくワンコーラス分とかのデモを作っちゃって、しばらく時間を置いて冷静に見直してっていう繰り返しで。そうやって作った曲をSteveに送ったりしたんです。レコーディングしながらいろいろ探っていくっていうんじゃなくて、曲を作っていく時に考えるだけ考えておきたかったんですよ。議論を散々重ねておく。それで演奏する時は頭を真っ白にして演ればいいなって、そういう進め方でした。

●今までと比べても面白い進め方ですね。

永友: そこには新たな初期衝動があるんですよね。●どういうことですか?

永友:要するに、新しいテクノロジーを導入したことに対する…。

●オタク気質だから(笑)。

永友: Pro Toolsに対する初期衝動っていうのがあ

10

「"なんでロックやってるのか"とか"なんで音楽やってるのか"っ ていうことですよね。要するに、なにかを吐き出したかったんです」

って、それで何曲か書けたりとか。

●それはすごいモチベーションですね。

永友: そうなんですよ。

菊住:コピー&ベーストを失敗してリフが16分音符個分ズレると「あっ! かっこいい!」って。ちょっと速くしたりとか遅くしたりとかを客観的に聴いたりも出来るし。やっぱり演奏している感覚と聴く感覚には違いがあるけど、今回は完全に聴く感覚になれたから。

梅田:イマイチな部分が見つかりやすいから"もっとこうしようよ"っていうアイデアがどんどん出てくる。そういうのも楽しいし、守代司が言ってた、 偶然が生んだおもしろさを意図的に作ってみたり。 楽しかったし、新鮮でしたね。

●そうか。アイデアを誘発させるネタを作ることが 出来るんですね。

永友: それに言い駅出来ない感じがいい。パンドで 演ってて何か変だと思ったときとか、すぐ人のせい にしたり出来るんです。「なんかドラムのグルーヴ が突っ込んでるよな~」とか言えちゃう。でも、な んせその時は打ち込みだから(笑)。

●Pro Toolsは間違ってはいないですからね。

永友:絶対正しいんですよ(笑)。

梅田: イマイチ下手なのは、ベースかギターに問題 があるというのは明確で。

永友:グルーヴがよくない原因が、波形で見えちゃったりしますからね。そういう意味で、いいコーチでもありましたね。

●なるほど。パンドとしての今までの流れを振り返ってみると、2ndアルバム「108DREAMS」(2006/2/15リリース)ではポップを突き詰めて、その後の「BAN BAN」〜渋谷公会堂という所でもうちょっとライブ寄りというか、ロックの本質的な醍醐味を重視するような流れでしたよね。さっき「渋谷公会堂が終わってツアーか終わったときっしゃっていましたが、そこで曲の作り方を変えて、

見えてきたモノは?

永友: "なんでロックやってるのか" とか "なんで 音楽やってるのか" っていうことですね。曲の作り 方を変えたことだけじゃなくて、そういう悩んでい た時期に考えていたことだったり、ニューヨークで のレコーディングも含めてなんですけど。要するに …なにかを吐き出したかった (※18)。

●はい。

永友:でも方法として音楽を選んでいる駅ですから、 アウトブットする時は絶対にボジティブなカタチに なってるのがいちばんいいんですよ。ドロッとした モノをただ吐き出すだけだったら、町中で叫んだっ ていい駅だし(※19)。そうじゃなくて音楽とい う形で表現することで、もともとドロッとしたネガ ティブがモノを楽しめるモノに…エンターティンメ ントになるっていうのが素晴らしいことだと思うん ですよね。2007年に僕たちがやってたのはそうい うごとだったと思うんです。もっと楽しめるものに したい。自分がワクワクしたいというのもあったし。

●それは今作を聴くとビンビン伝わってきましたね。 もともとキャプストが持っている核のひとつだし。 永友: 「わがままチャック」みたいな曲も、作ろう と思って作ったというより、出来ちゃったんですよ ね。 "とにかく何か爆発したい" みたいな想いがあ って、あまり計算してないんです。

●これも永友宅で出来た曲なんですか?

永友:そうです。

●渋公に関する以前の取材で永友くんは「渋公は射精するくらいの勢いで」と言ってましたけど(※ 20)、今作を聴いた時、キャプストのライブで感 じる駅のわからないインパクト… "勃起感" という か、パンドとしての根源的な部分を追求していきま す、という意志の表れだと感じたんです。

永友: 結果的にそうなりましたね。最初からそういうものを作ろうと目指していた訳じゃないんですけど。3人集まって演奏して、曲作ってライブしてというところから、違う意味で"バンドになれた"という感じがありますね。同じ釜の飯を食ったり、毎日会って音楽の話をしたりして。

●一緒にお風呂入ったりとか。

永友:そうそう。お互いの背中流したり、自分の身体に石鹸つけて…(※21)。 一同:(笑)。

永友:そういうことを経て、今までよりもうちょっと高い位置からバンドになれたなって実感があるんです。回結したっていうか "何をやっても大丈夫だ"という感じ。ニューヨークで録った曲の中で、バンド感が最もストレートに出てるのが「わがままチャック」だったんですよ。だからこれをシングルとして最初に出したいなって。 "これだったら迷い無く演奏できるし歌える" っていう感覚を信じてシングルにしました。

●不思議な曲ですよね。メロディからはピンク・レディーの『UFO』のようなベタなボップ的要素を 感じたんですけど、グルーヴからはThe Rolling Stonesの「悪魔を関れむ歌」を思い出したりして。 ルーツがわからないけど不思議な…っていうかキャ ブストの流れだと「GOOD HARVEST」とか「舟」 とかああいう、泥臭い感じの。

永友: そうですね、間違ってもカフェ (※22) ではかからない (笑)。だけど、ロックは "異物感"っていうか、普段暮らしていて感動するつもりも無いのに感動しちったりとか、心をかき乱されちゃったりするのがロックのパワーだと思うんです。その感じをすごく大事にしたいなっていうか、そのまま出したかった。

●ロックをもっと信じようと。

永友: "俺はなんでソロじゃなくてバンドでやって るんだろう?" とか考えたんです。みんないろんな 想いを込めてバンド名を一生懸命考えたりするのは なんでかと考えたら、やっぱり僕が思うのは変身願 留なんじゃないかと。

● "変わりたい"っていう。

永友:やっぱり別人格なんですよね。永友・梅田・ 菊住の3人でキャブテンストライダムなんですけど、 それとは別に "キャブテンストライダム" っていう 人格があるっていうか。今思えば「 "キャブテン何 とか" にしたいな」って最初に言ってたのは、"キャ マブテン…" っていかにもヒーローっぽいし、やっぱり変身際望かあったからだと思うんです。

●なるほど。ちょっといい話ですね。

永友:キャプテンストライダムっていう名前で活動 してるから「わがままチャック」みたいな歌詞も歌 える。

●カップリングの「CHERRY BOY」もそうなん ですけど、"シンプル"っていうのがいちばん大き いのがなっていう気がしてて。それは構成やアレン ジの話とかじゃなくて、あれこれ考えてないシンプ ルさというか。実際には考えてるのかもしれないで すけど、何も考えすに聴けるというか、まさに初期 衝動的なパワー感がある。

梅田:いろいろと重ねていって、最初の新鮮な感じとかが段々丸、なって作ったというよりは、「わがままチャック」は出来た時から3人で盛り上がってた曲で。「ロックンロールだな」っていう刺激で、どんども歌詞もついていって。だからあれてれやるよりも、最初に出てきた芯の部分を出来るだけ太くするっていうアブローチがいいと思ったんですよね。"LOVE YOU LOVE YOU LOVE YOU LOVE YOU LOVE YOU LOVE YOU ンマロルでて絶対盛り上がれるし、あまり着飾らない方がいいと。そういう意味ではシンブルですよね。

●そうですよね。あと歌詞に関してなんですけど、 今作の歌詞から吹っ切れた印象を受けたんです。

永友:一瞬の集中力で出て来て、「直したほうがいいのかな」って後から思ったんですけど、そういう所を大事にしたかったのでそのままにして。それがさっきの「異物感」に繋がると思うんです。どこから見ても綺麗なモノっていうより、何かいびつなんだけど全体では調和してるっていうモノを目指したんですよね。

●確かにそういう"いびつな部分"が気にならないというか。「わかままチャック」の歌詞に"食事の後にはどこぞの小部屋でメラメラ"とかあったり、「CHERRY BOY」なんてタイトルが既にそういう"いびつさ"を持っているし。でも特徴的な言葉がボンと入ってても、あくまで流れの中だから自然なんですよね。まあ、こういう言葉にも反応する人は居るんでしょうけどね(※23)。

永友: 生々しいですよね。 ●生々しくて、それがすごくいいです。それで3曲 日には渋谷公会党 "BIG RAN" のときの「帰わや

目には渋谷公会堂 "BIG BAN" のときの「帰れやしないぜ」ライフテイクが収録されていますが、これは同時リリースするLIVE DVD「LIVE IN SHIBUKO "BIG BAN BUZZ"」を買って欲しいという意志の表れ以外の何物でもないなと(笑)。 永友: そういういやらしい思惑は一切無いですよ!まあ・・・DVDが同時発売なので、その予告編も兼ねで(※24)。

● 「帰れやしないぜ」という曲をチョイスしたのは、 「わがままチャック」や「CHERRY BOY」との 統一性なんでしょうか。歌っている内容の。

永友: そうですね。もともとライブテイクは入れようと思っていたんですけど、当初は違う曲にしようと思ってて。でも「わがままチャック」と「CHERRY BOY」の、男の哀愁的なデーマの流れがあったので、シングルとしては統一感というか、美しいんじゃな

●その渋谷公会堂 "BIG BAN" ですが、今から振り返ってみると、あの日のライブはどうだったんですか?

永友:やりきれた所とやりきれなかった所があって。 終わった後、僕はやりきれなかった所を気にして考 え込んじゃったんですよね。そこまですっと準備し てきたのが終わったっていうのもあったし、ホント はもっといいライブがしたかったけど自分の中で納 得がいかなかったことが沢山あったんです。

●やりきれなかったのは、具体的にはどういう点で すか? 永友: 演奏的なことっていうより、精神的なことで。 もちろん演奏的にこスしてるなっていう所もあるん ですけど。要するに自分の頭の中でシナリオを書い ちゃったんですよね。それが僕的にはよくなかった なって思う部分があって。

●なるほど。

永友:ライブの流れを決めてしまって、 "ここでこういう気持ちで演奏しよう" みたいなことを考えちゃやっぱりダメなんですよね。

●そういうことですか。

永友:その時思った気持ちで演奏しないとダメなんだけど、頭の中でシナリオを追っている部分っていうのがあったかなと。そういう反省があって。

●なるほど。

永友:でもその後、DVDとしてリリースするということを決めて当日の映像を観たら、自分でも予想がつかなくておもしろかったりするんですよね。例えば歌い回しがリハーサルでやってたのと違っちゃってたりとか、自分で思ってなかった動きをしちゃってる所っていうのがおもしろくて。そういう、自分でも計算してなかったりすることってその時の正直な気持ちが出てるということじゃないですか。そういうのがおもしろいんですよね。DVDを自分で観た時に気付きましたね。

●梅田くんはどうですか?

梅田:懐かしいなって思った(笑)。

●かなり前ですからね。

柳田:でも、まだ1年経ってないんですよね。確かにあの頃は渋谷公会堂でやるという大目標に対して動いてて、その前の1年間のライブとかレコーディングも(渋谷公会堂に)繋がっている感じで、そこから俺たちは、初夏くらいから始めて今でも続行中だけど製作をしてて。アメリカに行ってレコーディングしたり、最近も次に出すアルバムに入れるであろう曲(※25)を作ってる。そういう風に繋がっ

てる感じはしますけど、渋谷公会堂はその中のひと つの大きな区切りだったと思います。

●菊住くんは?

菊住:あの日のライブでアルバム「BAN BAN BAN」 が完成というか。その後のツアーは自分たちの中で は"アルバムを経てキャブストはどうなったか"と いう位置付けのツアーで、もう新曲も演っていたし。

●あの日はすごくいいタイミングで「長い坂の登る 途中」を演りましたよね。 "永友くん、ちょっと泣 いてたんじゃないの?" という疑惑もありましたが (※26)。

永友:はい(笑)。

●まさにあの日のあの場所というのは、キャブスト にとって"長い坂の登る途中"だったんだとすごく 実感出来たんです。そういう意味で、あの曲があの ライブを象徴してますよね。

永友: そうそう、あの曲は僕もそうでしたね。それまでのライブの流れもそうだし、やっぱりなんかそれまでの総決算っていうか。だから僕にとって渋谷公会堂は「BAN BAN BAN」だけじゃないんですよ。今までリリースした「ブッコロリー」(1stアルバム: 2003/11/26リリース)も「108DREAMS」も全部含めて、全部出しちゃおうっていう。やれることは全部やりたいし、その時点でやりきれなかったことも含めて、その時点でのキャブテンストライダムの集大成だったんです。DVDを出すなら、その時の自分たちの全部を出したいなと。

●いい場面だけではなく?

永友:そうですね、すべてをさらけ出そうと。なんか、そういう意味で出し尽くしたっていうか。だからその後なんとなく抜け殻というか、燃え尽きた感じになったっていうのもあったのかもしれないです(※27)。

RELEASE INFORMATION

New Single わがままチャック



Yeah! Yeah! Yeah! Records AICL-1815 ¥1,223 (稅込) NOW ON SALE

LIVE IN SHIBUKO "BIG BAN BUZZ"



Yeah! Yeah! Yeah! Records AIBL-9121 ¥3,990 (稅込) NOW ON SALE

LIVE INFORMATION

"DIENOJI ROCK FESTIVAL 3" 2/08 (金) 川崎 CLUB CITTA' (オールナイトイベント)

http://www.captain-a-gogo.com/

地球と読者に優しくてメンバーには手厳しいキャプスト註釈

※1: 渡米の前日はインディーズ時代から苦楽を共にしたディレクターの結婚式。キャプストがメジャーデビューして必死になっている傍ら育まれた社内恋愛だった。 ※2: みんな大好きキャプテンストライダムの略。他にも"キャプテン""ライダム"

"CTSR" "キム" などが確認されている。 "キ" とかでいいと思う。

※3:寝耳に水/藪から棒に:何故か慣用句を連呼する永友。結構そういうとこある。 この発言を"まさに青天の霹靂でしたね"で締めくくれば完璧だった。

※4: Steve Jordan: ドラマー、作曲家、プロデューサー。Keith RichardsやBob Dylan、Sheryl Crow、奥田 民生などのレコーディングにプレイヤーとして参加し た他、プロデューサーとしてはAlicia KeysやBruce Springsteenなどの作品を手掛け る。Robert Crayのプロデュースでグラミー賞も獲得。世界一のドラマー。

※5:事務所パワー:キャプストはHit&Run所属。ソニーグループのマネジメント会社。奥田民生やPUFFYが所属している。

※6: **(笑)** 付けといて:読者が誤解しないように気を使いながらも、インタビューを面白くしようとする姿が微笑ましい。

※7:The Verbs: Steve Jordanと彼の妻・Meegan Vossによるユニット。2006年の来日ツアーに専田民生が参加した。

※8:ファーストネームで呼び始めた。

※9:初めて対面した日、Steve Jordanは永友にJimi Hendrix、梅田にBob Dylan、菊住にLed Zeppelinのポスターをプレゼントした。

※10:普通の:梅田、失言。

※11:日本でもマジな顔して「ダメ!」って言えばいいと思う。

※12: そういう話を聞いて「わがままチャック」を聴くと、なんとなくザーザー鳴ってるような気がしないでもない。かもしれない。

※13: 渋谷公会堂の略。2006年10月から5年間限定で "渋谷C.C.Lemonホール" という名称になっていることはもうみんな知ってるよね? "渋C"とは略さない。

※14:イメージ的にはホセ・メンドーサ戦直後の矢吹丈。

※15:キャプストは今までも自らに様々なハードルや刺激を課し、それに対する反発でモチベーションを上げてきたドMバンド界・期待の星である。

※16:オフィシャルHPの日記を読んでいる人は知っていると思うが、6~8月にかけて永友宅に集まり料理を作っていた。曲もちょっと作った。

※17: Pro Tools: デジデザイン社が開発したデジタルオーディオプロダクションシステム。パソコンで簡単に音楽編集が出来る。

※18: このセリフのときの永友はミュージシャンっぽかった。

※19:そんな勇気なんて無いクセに。

※20:射精: JUNGLF★LIFE 112号参照。この発言はネット上でも話題になった。

※21:身体に石鹸つけて:最近は無茶なフリにネタをかぶせることが出来るようになった。成長した。

※22: その昔、立ち寄った大阪のカフェで1stアルバム『ブッコロリー』を店員に 渡したらその場でかけてくれたことがあった。「僕らはオフェとか似合わないんだ なっていうのがわかって、その時ちょっとショックだったんです」と永友は遠くを 見つめた。

※23:前述の "射精発言" を掲載したJUNGLE★LIFEを始めとする下ネタ的発言が多くなってきた永友は、ファンの女性から「最近下ネタが多くて非常に残念です」という手紙を貰ったことがある。

※24: DVDも買ってね。

※25: セッションで作り上げたディスコビートの曲とかあるらしい。

※26: 泣いてないつまらない。

※27:肉体的には射精しなかったが、精神的に射精したというところか。

interview&text: Takeshi,Yamanaka、assistant: 横尾公幸